新同人雑誌評

【同人雑誌募集】発行ごとに【三部】、左記の宛先までお送りください。
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学内
三田文學編集部 新同人雑誌評 係

加藤有佳織

先日、まばゆく輝くビル群のあいだに赤い皆既月食を見上げました。**夏当紀子「夜明けの晩をゆらゆらと」**（「飢餓祭」vol.49）の「全身をむしばまれてしまった七八歳のあなた」は、月食の翌晩、西の空に「白々と大きく」光る満月を見ます。戦争で孤児となり、フリージャーナリストであった夫を亡くし、病の治療を拒みながら独居する「あなた」つまり里津は、毎日夜明け前の最も暗い時間帯に農道をため池へ散歩します。暗闇を散歩するのは、眠れないからでもあり、夫との会話をたどるためでもあり、衰弱した自身を人目に曝したくないからでもありました。白い満月を見た日、彼女の孤独な散歩に思いがけない同伴者が現れます。三月ほど前にこの地へやって来て、農家で働いているという21歳の実でした。農産物の盗難を防ぐため、彼女もまた夜明け前に見回っていたのです。「匂い」に惹かれて声をかけたと言う実から、妊娠していることを打ち明けられると、里津はためらいなく「産むのよ」と応じます。しかし、即座にそう答えてしまったのはなぜだろうと、帰宅してからも「落ち着かない」のです。翌日、かすかに期待をしながら散歩へ出ると、ふたたび実が現れます。東北の酪農家で出産し働くと知らされます。自分が「尊敬されるような仕事についてはいけない」と考え、詳細を知らされないまま遺骨のない夫の死と15年寄り添い、間近にある自分の死をひとりで引き受けようとしている里津の凛々しくぶっきらぼうな言葉と、それらが表さない情感を伝える月食と満月のイメージとが、巧みに響き合う作品でした。

早高叶「鳥玉（とりたまゆら）響」（「カム」vol.20）の上井章子は、大学生であった20年前の春のある日、37歳のフリーターの男性を殺害しました。日頃から持ち歩いていた包丁を使って何の面識もない男性をやたらに刺した通り魔殺人犯として、章子は合計18年の刑期を終え、現在は清掃員として働いています。ひとり静かに暮らしていますが、「生きていることは無意味だ、と考えることにさえ倦み疲れるほど、無意味な日々だ」と感じている彼女のもとに、「たまゆら」と名乗る儚げな少女が現れます。幼い頃にねだったものの、母から「きっところしてしまうから」飼わせてもらえなかった小鳥を思わせる少女に続いて、司法修習生をしている20代後半の女性がやって来ます。章子が男性を刺したとき、その男性が襲っていた少女でした。血飛沫を浴びながら章子は、組み敷かれていた少女に「もう、大丈夫だよ」と言い、一切は「秘密だよ」と約束しました。章子も少女もその約束を守りましたが、司法修習生となったかつての少女はずっと謝りたかったと、章子を探し出したのです。さらに、章子自身も思い出そうとすると「頭の中が（中略）真っ

佐々木義登

中島隆「いつか飛ぶだろう」（「雑記囃子」第27号）の主人公は配達業務を主とする新聞販売店の社員で、早朝から慌ただしく仕事をする毎日です。配達をしたはずの文化住宅から不配のクレームが入り再配達すると、そこに自分の姿を見るなど、日々の暮らしに潜む亀裂のようなものが描かれ始めます。やがて集金日を迎え、主人公が会社の金をスロットに使い込んでいたことが明かされます。タイトルの「飛ぶ」とは取り返しのつかない状況に陥り会社を辞めることです。切迫した状況で新聞を配達するラスト、主人公のゆく道は現実世界から遊離していきます。絶え間ない繰り返しの中に埋没する日常が、破綻してゆく展開は読み応えがありました。

吉永ケイト「なんだポトスじゃないか」（「P.」41号）の主人公虹子は五十歳を前に定期預金の満期を迎えました。彼女には昔から付き合いのある従姉妹がおり、彼女たちと昭和の臭いがする喫茶カトレアで延々と世間話をします。話題の中心になるのは裕福な農家に嫁いだ従姉妹の玉恵のことでした。かつて彼女の住まいを訪れた時には夫がコオロギの繁殖で成功し、羽振りの良い暮らしをしていましたが、痩せ細った姿で生活保護の手続きに訪れたというのです。やがて虹子は満期になった三百万円を車の購入のために下ろします。しかしその気持ちはすぐに揺らぎ、昔恋人と訪れたベネチアを再訪しようという思いに取って代わられるのでした。折々に登場する生命力の象徴のようなポトスが効果的でした。日々の営みの僅かな齟齬を丁寧に描き込む筆致は見事でした。

森上晶「あなたはどうして、ここにいるの？」（「樹林」Vol.685）主人公「わたし」は七年前に脳梗塞で倒れ、いまだ後遺症の残る母親と二人で暮らしています。会社では非正規雇用として雑用のような仕事をしています。あるとき彼女はそこにいるはずのない小さな人形の姿を目にします。それは幼い頃「エミリ」と名付けて大切にしていた指人形でした。「わたしを見てはいけません」と言いつつ存在感を増してゆく人形と、職場で同僚たちの視界から消え、存在感を喪失してゆく主人公の対比が際立っていました。

宮内はと子「みわの光」（「カム」vol.20）の主人公は地元のスーパーに就職して二十年以上、ベテラン社員として店内のあらゆる業務をこなしています。ある日、中学までのクラスメイトで、生徒たちから恐れられていた苛めっ子の長井みわと再会します。主人公にとって最も会いたくなかった彼女は、現在では身を持ち崩し、苦しい生活を余儀なくされていました。自殺未遂のみわを助けたことから、彼女との関係を深めてしまう主人公なのでした。距離を置

加藤評

黒になってしまう」経験をしており、彼女の猟奇的な暴力には、幾層もの意味合いが折りたたまれています。そのことを語る物憂げながら意志の強い声に説得力があります。

立石富生「それだけの生」（「火山地帯」第206号）は、複数の人物が、自宅でひとり亡くなった藏崎三登志という人物について語ります。ハンセン病家族裁判をとおして彼と知り合った新聞記者が、関係者たちに取材をしているのです。隣人や町内会長に加え、小学校の同級生であり国立ハンセン病療養所職員の兼田信彦、兼田の姉、療養所で同時期を過ごした同年代の男性、藏崎が療養所を出て働いた職場の上司、藏崎の娘である峰島さつき。彼らの証言をとおして、及川俊郎という少年がどのようにして藏崎三登志となったのかうかがい知ることができます。彼について知らないことがあると知らない人、知らないことがあったと知った人、そして知りながら悔いる人、それぞれの言葉が紙面からあふれるようでありながら、「それだけの生」と括るタイトルが一層重く響きます。

文化の異なる他者との出会いを大仰にではなく、しかし誠実に描く作品が目を惹きました。日本語教室を舞台とする**稲葉祥子「日本語練習帳――受身形／実は／ひらがな」**（「雑記囃子」第27号）では、ウクライナ難民と思われる生徒を描く「ひらがな」がとくに印象深く、同時代の出来事を映す鋭敏さも同人誌作品の持ち味のひとつであるとあらためて感じました。**佐伯厚子「遠い入道雲」**（「樹林」Vol.685）では、90歳間近ながら鍬鑠として畑を耕す谷田フサが、農場で働くミャンマー出身の青年「ミン」と出会い、彼女が生き抜いた戦争と青年の故国の戦争が重なります。**小松原蘭「希望の轍」**（「遠近」第80号）は、10代はじめに通っていた学校で音楽教員を引き受けるため30年ぶりにソウルを訪れる笛子をとおして、異文化のなかで他者として生きることの悲喜を描く作品でした。

中野真「ノッキング・カズ」（「P.」40号）では、大企業の管理下で蜜柑栽培に従事する家に生まれた野崎アンリがプロサッカー選手を目指しています。11歳にして体格に恵まれている彼はすでにJリーグ出場経験がありますが、才能と環境に恵まれたチームメイトに憧れと嫉妬を覚えながら、111歳にして現役のキング・カズと関わりを持ち、なぜサッカーをするのかという疑問と闘い、成長していきます。111歳で現役という設定はあり得なくはないと思わせるおもしろさとさわやかさがありました。

たたら製鉄の起こりを描く**新井伊津「真金吹く」**（「六伽士花史」第二号）は、祈禱を役目とするアゾヒメが魅力的で、渡来者への好奇心と恐れをよく体現しています。**中小路そら「髪結いお袖」**（「組香」第七号）は、平坦ではない人生を語る「あたい」の声が生き生きとしています。**篠原紀「大晦日」**（「創作」I）は、年末の忙しない寂寥感のなか不意に披露される消失マジックが鮮やかでした。

佐々木評

きたいという思いと裏腹に、みわの人生に立ち入って彼女の社会復帰を助けてしまう主人公の機微が丁寧に描かれていました。

篠原紀「超能力」（「創作」II）交際相手だった夏美が大学時代の終わりに突然沖縄へ去り、主人公「僕」は傷心のまま社会人として就職しています。久しぶりの同窓会で再会した夏美から、リライという名のアメリカ人を紹介され、ひょんなことから彼と野球観戦に行きます。その帰り、「超能力はいりませんか」と突然切り出された「僕」は彼の言うまま奇妙な体験をさせられます。お経のような歌と共に、リライから聞かされたのは、再会したはずの夏美が沖縄で死を遂げていたという事実と、その壮絶な経緯でした。全編に流れるシュールで不穏な気配と共に、ラストで主人公が見る幻覚のような体験の描写が圧巻で、書き手の強烈な個性を感じました。

三上弥栄「犬と暮らしたい人」（「星座盤」vol.16）の主人公「誌音さん」は四十代半ば、夫との二人暮らしで最近田舎に一軒家を建てました。彼女の夢は大型犬を飼うことでした。子供を諦めた現状を妹に指摘されて、わだかまりを感じたり、二十年以上務めた会社で仕事に忙殺され、心の余裕をなくしてゆく彼女にとって、犬との暮らしを思い描くことだけが心の拠り所となっています。疲弊した彼女が仕事帰りに散歩中の二匹のバーニーズマウンテンドッグにじゃれつかれるラストは印象的でした。転倒しドロドロになりながら犬たちと戯れ「犬分を補給」することで人間性を回復する姿を好ましく読みました。

立石富生「それだけの生」（「火山地帯」第206号）には作者の覚悟を感じました。ハンセン病の元患者である藏崎三登志という老人が、ある日自宅で死を遂げます。死の経緯や彼の人生を新聞記者が取材して回り、藏崎の人生に関わった人物が証言する形でストーリーが展開してゆきます。少年期にハンセン病に罹患し、苦悩に満ちた人生を送った一人の人間を他者の証言によって浮かび上がらせるという手法で、安易な感動物語にも、悲劇の押し売りにもならず、エンディングまで客観的に描き切った筆力に感服しました。

新荘直大「がぶがぶ人間盛衰記」（「駒場文学」95号）は何にでも噛みつくことで対象のもつ感情を感じ取る中津かさね（自称「がぶがぶ人間」）と主人公の男子大学生の物語です。他者に寄り添う気持ちを失いつつある、現代のコミュニケーションの問題へ落とし込まれてゆく展開を面白く読みました。

それ以外では**水田まり「ピンクのワンピース」**（「中部ぺん」第29号）、**春木静哉「渇水」**（「こみゅにてぃ」第114号）、**中野真「ノッキング・カズ」**（「P.」40号）、**佐伯厚子「遠い入道雲」**、**藤岡真衣「綿入れさん」**（いずれも「樹林」Vol.685）を興味深く読みました。